

四季の道

友直 茂子

教員時代、吉備高原の辺地校に勤務が決まった。「遠い。雪道が大変」と思わず口にした。それまでは、比較的近距離の津山線沿いで交通の便が良かった。

4月、冬の眠りからまだ覚めやらぬアップダウンとカーブの多い整備された農道を走る。早朝、ほとんど対向車はない。芽吹き始めると、ツツジが鮮やかに周囲を彩る。しばらくすると緑のトンネルの中を運転する。距離20キロの間に信号機はない。

ある日、上り坂になる直前、正面の崖の上に緑色の腹と赤い鶏冠を付けたキジを発見。野生は初めてだが、はっきりと確認できた。ちよつと興奮した。また、真つ暗な夜道を帰宅中、

ライトの中に2ひきのイノシシがシルエットのように浮かびあがった。瞬間、知人の「イノシシが体当たりをしてきた」の言葉を思い出した。迷いはあったが、スピードを落として通り過ぎた。

7月末になると、アキアカネが飛び交う場所がある。低地より一足早い秋の気配を感じ
気持ちがりフレッシュする。ゆっくりゆっくりアキアカネの中を走行。

秋が日ごとに深まると紅葉のスポットを発見。一直線の道路の向こうに御津郡(当時)で一番高い本宮山の雄姿に向かい20秒ほど走る。「この風景を毎日のように接すればどこにも紅葉狩りにも行く必要はない。私だけの風景だ」と独占欲が湧いた。

初めての冬は、起床するや窓から雪の状況をチェック。心配するほどの雪はなかった。

2年目、大雪に見舞われた。早目に帰路に着く。こんな日に備え、マイカーはマニュアル車の前輪駆動車。12月には冬用のスタッド

レスタイヤに替えていた。

数百メートルの直線の上り坂にさしかかった。「止まらないこと」呪文のように繰り返しながら走行していると、3分の2程上った所で対向車が来た。私の方に滑って来る。思わずブレーキを踏むと雪道に突っ込んだ。

アクセルを何度も踏むが発進しない。毛布をタイヤの下に置いても効果なし。後ろでトラックが止まっていた。運転手さんは私に替わってエンジンをふかしてくれた。何度も繰り返し後、「平坦な所までバックさせよう」と言うや、トラックと私の車をゆっくり移動させてくれた。

「今度は絶対に止まらないように」と注意されたが、私は寒さと緊張で全身がこわばっていた。上り切ると安堵感と運転手さんへの感謝の気持ちでいっぱいになった。

退職して15年。辺地校での7年間の教員生活は運転技術の向上と身近な自然の移ろいの楽しさを味わわせてくれた。

先日、かつての通勤道の農道をドライブしてみた。芽吹き始めた木々の間には、高く広く繁殖したツツジが、道路の両側に燃えるように咲き誇っていた。

作者 友直茂子

山陽新聞夕刊エッセー

題名 四季の道

2019.04.21 掲載